

建築語彙のなかの「シブイ」とその国際化過程

THE DEVELOPMENT OF "SHIBUI" INTO A GLOBAL TERM OF ARCHITECTURE

江本 弘^{*1}

Hiroshi EMOTO

Shibui is an esoteric word expressing a type of beauty considered as typically “Japanese,” which gathered a momentum in the postwar world of Japonism during the 1950's and the 60's. This term, somewhat related to the quality of Japanese traditional architecture, would come to be appropriated as one of the accelerating forces of contemporary architecture, regardless of whether it was avowedly Japanese. An overview of written sources from the interwar period reveals the global reality of overseas interests (as well as domestic antipathy and indifference) in the *shibui* debate, and the architectural contexts into which it would be merged.

Keywords :global history; modern architecture, *Shibui*, architectural theory, Japonism,
 グローバル・ヒストリー, 近代建築, シブイ, 建築理論, ジャポニズム

1. はじめに

本稿は、1920年代末から60年代にかけて日本国外で受容された「シブイ」(Shibui)の語の伝播の過程を編年的にたどり、建築における「日本的なもの」をめぐる国際的論壇史の一端を明らかにするものである^①。この語は現在、日本国外において、日本建築を論ずるさいの術語として定着している^②。しかし日本国内、少なくとも現在の日本の建築界においては、この事実に対する認知はほぼ皆無であると言ってよい。

建築における「日本的なもの」をめぐる論壇史研究には、すでに磯崎新や五十嵐太郎らによる蓄積がある^③。ただし文献研究としては、これらの考察対象は日本国内の論壇史に局限されており、用いられる史料も日本語で書かれた、日本国内に流通していたものを主とする。しかし、特に本稿の対象年代においては、建築における「日本的なもの」をめぐる概念形成は、実際には国内外のさまざまな主体による情報網を条件とした、広範な受容現象であった。それは日本国内に閉じた言論空間で行われたものではなく、ときに日本人主体すら含まない、情報ネットワークの総体のなかで進行した。

「シブイ」という術語の国外における受容現象は、このような問題意識を念頭においたときに、ひとつの重要な着眼点を与える。すなわち、「シブイ」なる語の受容史には、建築における「日本的なもの」という同一のトピックをめぐり、日本と国外との情報交換および、現在にまで影響を及ぼす、その断絶の過程が含まれている。その実態を日本語論文として実証的に辿りなおすことは、これまで日本国内に限って考察してきた日本建築論の展開を、世界史的な視座から相対化する試みのひとつとして現代的な意義をもつ。

2. 初期：英米の日本庭園受容と独語圏の日本建築受容から

2.1. 英語読者への「シブイ」紹介

国外受容初期の「シブイ」にかんする知識生産は、おおよそ、アメリカ人旅行者をターゲットとした、観光立国を目指す政府主導の取り組みのなかで進行した。この経緯のなかで「シブイ」の語は、日本文化全体の特質を公表するための標語にさだめられたのだった。日本語としての「渋い」は当時口語表現であり、その意味内容は美学分野においても明確に定義されていない。他方、外国語、とくに英語としての「シブイ」には、このような目的意識から、日本人の論客によってさまざまな定義がなされるようになる。

日本語以外の言語で「シブイ」という語が紹介されはじめたのは、日本庭園の紹介の文脈である。なかでも英『ステューディオ』誌寄稿者の原田治郎〔1878-1963〕が1928年に発表した『日本の庭園』^④はその先駆けにあたる。ここで原田は、禪の影響を受けた茶の湯の美学が「万物に『シブミ』を吹き込んだ」(p. 4)のだと論じた。原田によれば、このときの「シブミ」の定義とは以下である。

それは一般に「austere [禁欲的]」と翻訳されるものだが、この語が含意するような厳しさの意味はない。それは謙遜の質であり、何の変哲もない見た目の奥に隠された、教養人にしか分からぬ洗練された趣味のことなのである。(同)

同様の定義はその後の『日本建築の教え』(1936)のなかでも繰り返されているが、さらに原田はここで、日本建築の「シブミ」の要因として、日本人共通とされる「自然愛好および奇麗好き、そし

*1 日本国学振興会特別研究員(PD), 千葉大学 工博

JSPS Research Fellow (PD), Chiba University, Dr.Eng.

て捉えがたい美を解する洗練された趣味」⁵⁾を挙げた。そして原田のこれらの日本庭園論・建築論はとともに、日本人によって書かれた主要参考文献として、1950年代後半まで「英語読者のなかで長らく独占的な位置を占める」⁶⁾こととなった。

これらの原田の著作は英ステューディオ社（チャールズ・ホーム編集長）の求め、すなわち国外の需要に応じて書かれたものだったが、これは当時の日本人による知識生産として例外的だった。原田が『日本の庭園』を発表した2年後には鉄道省の外局として国際観光局が設置され、国内の観光地整備が本格化する。その後の1934年には外務省の外郭団体として国際文化振興会（Kokusai Bunka Shinkokai、以下KBS）が組織され、国外向けの日本文化宣伝は加速した⁷⁾。この1930年代、特にKBS発足のちには、日本人によって書かれた国外向け日本文化論の多くは政府主導の出版事業によって流布していく。原田もやはり1937年にKBSより『日本人的理想の一瞥』を出版し、「サビ〔寂び〕」と同義とされる「シブミ」が、「我々〔日本人〕にとっては真の美のために欠かすことのできない質である」⁸⁾ことを再三強調した。

こうした政府の動きに先駆け、民間の取り組みのなかで日本人の美的感覚を「シブイ」に集約させて宣伝した初期の例に『日本とジャズ』（1930）がある。ここで定義された「シブイ」とは「冷たさ、形式性、静穏、高潔、自制といった古典芸術の特質」のことであったが、同時にフランク・ロイド・ライトの帝国ホテルも「その莊しさやグロテスク性に古拙的雰囲気がある」点において「シブイ」であるとされ、定義の内容に多少の齟齬が起こっている⁹⁾。同著者はその後の1934年にも、箱根の富士屋ホテルが外国人宿泊客用に発行した英語雑誌『ウィ・ジャパニーズ』のなかで、日本人的美感の筆頭として「シブイ・コノミ」を紹介している。ただしここでは、同語の定義は「配置とバランスが正しい」とのみ触れられている¹⁰⁾。

この時代状況のなか、工芸分野において「シブイ」の語を紹介したのが、KBSより出版された、柳宗悦〔1889-1961〕の『日本の民芸』（1936）である。ここで柳は、「渋い」という言葉が日本国内で人口に膾炙している事情を紹介しながら、「深遠かつ謙遜的で、静かな感情」を意味するこの言葉こそが、「美の最高の形態を見極めるための決定的な基準」なのだと語った¹¹⁾。

こうした1920年末以降の英語文献の相次ぐ出版を通じて、日本語を読まない読者のなかに「シブイ」の語が紹介された。一方柳が『日本の民芸』で語っている通り、「渋い」は当時の日本人のあいだで常用されており、書籍以外のコミュニケーションも「シブイ」に関する知識生産の役を担った。たとえばブルーノ・タウト〔1880-1938〕は日向別邸の設計において、施主が要求する「渋さ」とは「チープさ」と同義だと、日記に託ち言を漏らしている（1935年7月4日）¹²⁾。一方タウト自身が考える「シブイ」とは、1936年講演「いかものといんちき」の中で述べる通り、日光廟の装飾過多に対置される日本的趣味であり、「出しやばらず、寡黙で、厳しい〔unaufdringlichen, stillen und herben〕」¹³⁾ことを意味する。

2.2. ドイツ語圏建築家の1920-30年代

上述の通り、英語以外の言語では「シブイ」にかんする知識生産はほとんど行われなかつたが、ドイツ語は例外にあたる。

戦間期の日独の文化交流は第一次大戦直後より高まりをみせてお

り、岡倉覚三の『茶の本』（英1906）は邦訳版に先だち、1923年ごろに独訳版が出版されている¹⁴⁾。同書は同時期のドイツ語圏の建築家にとって、日本建築の哲学を知るための主要な参照点となつた¹⁵⁾。

そしてこの独語版『茶の本』出版ごろから10年あまりのあいだに、ドイツ語圏の建築家のなかでの日本建築に対する興味は非常な高まりをみせた。特に1920年代末以降、ドイツ語の建築单著・雑誌ではしばしば日本建築が取り上げられている。なかでも1933年の『ディー・フォルム』誌は日本建築特集を組み、「完成された技術および、それと美的デザインとの直接的関係」¹⁶⁾を有する日本建築を紹介している。その2年後には吉田鉄郎〔1894-1956〕の『日本の住宅』¹⁷⁾がドイツ語で出版され人気を博した。ヴァルター・グロピウス〔1883-1969〕は戦後に来日したさい、「日本建築には私は既に若くから本を通じて親しみ、常に興味を持つておりました」¹⁸⁾と語っているが、この言明は、グロピウスが壮年期を過ごした、この1920年代初頭から30年代半ばのことを指すとみてよい。

しかし1930年代前半には、「シブイ」の語はまだドイツ語文献のなかでは紹介されていなかった。岡倉もまた、『茶の本』のなかで「シブイ」を論じてはいない。

ドイツ語での「シブイ」の初出と考えられるのは、1935年にドイツで創刊された『ニッポン：日本学雑誌』に掲載された、仏教学者・鈴木大拙〔1870-1966〕の講演録である。ここで鈴木は、「永遠の孤独〔ewigen Einsamkeit〕」という日本人特有の芸術感覚が『ワビ』、『サビ』（すなわち『シブミ』）なのだと論じた¹⁹⁾。そのほか、同年発行の対外グラフ誌『ニッポン』のなかでも、日本の工芸の特質として、「我々が『シブイ』と称する趣味の高等文化」²⁰⁾が筆頭に挙げられている。

以上の経緯にみられるように、戦間期ドイツ語圏の日本建築受容は、「シブイ」受容に10年以上先駆けていた。また、日本の論客によってドイツ語で説明された「シブイ」の意味内容も曖昧である。英語文献の流通と英語読者の存在が他国語圏にある程度開かれていたことを鑑みても、ドイツ語圏の建築家が日本建築の特質を「シブイ」に集約させて語るようになる条件は、当時のドイツ語圏には十分に整っていたとは言いがたい。

しかし、こうした日本建築受容を経験したドイツ人建築家は、国内の政局の変化に応じて1930年代にアメリカへと亡命する。ヴァルター・クルト・ベーレント〔1884-1945〕のアメリカ亡命は1934年、グロピウスは37年、ミース・ファン・デル・ローエ〔1886-1969〕は38年のことである。それは折しも、「シブイ」の語が日本から宣伝されていた時期にあたる。この時宜を得てアメリカに渡った彼らには、ドイツ語圏で得た日本建築の知識をアメリカに持ち込み²¹⁾、その地でみずからの日本建築觀と、英語化した「シブイ」を結びつけることができた。

3. 中期：1930年代半ばから終戦直後の諸相

3.1. 「シブイ」受容における潜伏期

昭和初頭以降の戦間期においては、日本人による「シブイ」の語の国外宣伝がなされた。しかし翻って、日本国外の論客が同時期に「シブイ」の語を用いた例はほんなく、タウトの日本滞在中の使用など数例に限られる。1930年代後半から第二次大戦開戦にかけての米国で日本建築の紹介に努めたラルフ・ウォーカー（1889-1973）

でさえ、「複雑性を孕んだ単純性」を骨子とする自身の日本建築論の中で「シブイ」の語を用いることはなかった²²⁾。一方で、アントニン・レーモンド〔1888-1976〕が1940年にニューヨークのジャパン・ソサエティで行った「日本建築の原則」講演は、ハイ・カルチャーとしての茶道に限定された言及ではありながらも、「シブイ」の語が建築家によって国外に紹介された例外である²³⁾。

そうして、こうした国外宣伝は、英語圏にかぎらない広範な英語読者のなかに、「シブイ」の語を徐々に浸透させていったようである。きわめて稀な例でありながら、日本文化の特質を「シブイ」にもとめる発想が存在したことは、KBSによる紀元2600年記念懸賞論文の一例に見出すことができる。1940年、KBSはこの祝賀行事のために国外から論文を募り、「日本文化とは如何なるものか」²⁴⁾を語らせた。そうして、このとき2等入選した、ドイツ人美術史家ルドルフ・ヘッカーの論文の題が「渋味」であった。ヘッケルによれば、西洋と東洋の世界観・芸術観の差異は、この語に集約されるのであった。論内の対照表では、「事実」を重んじる西洋に対して「自然の真（渋味）」を重んじる東洋が対置されている²⁵⁾。

一方、「シブイ」にまつわる知識生産にかんして、これまでの経緯のなかには日本人建築家・批評家は含まれていない。その理由として、まず、日本国内の日本建築論壇では「渋い」が美的基準としての認知を得ていなかったことが挙げられる。加えて彼らは、日本建築の特質を「シブイ」の語に託して国外宣伝する目的意識を他分野の論客と共有していなかった。吉田鉄郎がドイツ語で『日本の住宅』を出版した1930年代半ば、国際観光局からは岸田日出刀の『日本の建築』(c1935)が出版されており、ほか、建築史家伊東忠太(1867-1954)を筆頭とする全年代の建築家・建築学者に加えて、国際観光局局長の田誠を特別寄稿者に含む『建築の日本』(1936)も英語で出版されている²⁶⁾。しかし、吉田の著作に加え、政府主導のこうした宣伝活動のなかにも「シブイ」の語は現れない。

3.2. 1950年代初頭の戦後ジャポニズムと「シブイ」

そして英語としての「シブイ」の語は、戦後の1950年代より、にわかに国外のモダニスト建築家の人口に膾炙するようになる。

日本語を母語としない建築家による戦後の「シブイ」使用の初期例には、まずノエミ・レーモンド〔1889-1980〕の未発表原稿「室内デザイン論」(1954)が挙げられる。同論は当時の日本趣味のデザイン・ブームに応答したポレミックであり、ここでレーモンドは、当時のアメリカにおける「シブイ」の誤用(けばけばしい色を用いた日本趣味)に警鐘を鳴らし、「シブイ」と表現される「美しさの鍵は引き算なのである〔Elimination is the key to elegance〕」²⁷⁾と論じた。

また同年には、国立近代美術館で行われた「グロピウスとバウハウス展」に際して、グロピウスが日本に短期滞在している。そして彼はアメリカへの帰国後、ハーヴァード大学の講義のなかで、日本建築の特徴を要約するために「シブイ」の語を用いている。グロピウスの妻イーゼもまた「シブイ」とは「優雅と珍奇と質素と美を一度に表現する言葉」²⁸⁾であるとしているが、夫ヴァルターにおける「シブイ」の定義は、より建築的にこの言葉の意味内容に触れている。その講義で挙げられたのは「非対称性」、「木の素肌」、「単純性」のほか、「モジュラー・システム」あるいは「内部外部空間の融合(自

然への融合)」といった諸点であった²⁹⁾。加えてグロピウスは、戦間期にドイツで経験した日本建築受容の記憶を反映させ、禅と茶室への関心に繰り返し触れた。

「シブイ」の語はこのように、1950年代半ばの時点ですでに、日本国外の建築家のあいだでは現代建築の実践に資する標語として浸透はじめていた。そうしてこの語はときに、同時代の日本のモダニズム建築を表するために用いられた。チャールズ・S・テリーは1959年、「丹下健三：伝統の友にあらず」のなかで、ル・コルビュジエ〔1887-1965〕による打ち放しコンクリートの実践が日本の現代建築家に与えた影響を、「寡黙で、趣味がよく、純粹な——一言で言えば『シブイ』色彩」³⁰⁾のためであると要約した。

3.3. 柳宗悦の「渋さ」からエリザベス・ゴードンの「シブイ」まで

こうした戦後の「シブイ」使用はまず、戦間期のアメリカを中心とした「シブイ」受容をひとつの背景にもつ。

一方、この現象は柳宗悦が1953年にハワイで行った茶道講義や、その講演録である『茶の道』(1953)³¹⁾の出版を画期としたものともみなせる。終戦間もない1950年代初頭よりすでに、進駐軍などによる日本の文物の国外流出、ハワイやアメリカ西海岸における環太平洋美術展を通じて、戦後ジャポニズムはすでに隆盛を迎えていた。戦前には前出の『日本の民芸』(1936)でアメリカ人向けに「シブイ」の美学を紹介した柳であったが、戦後の柳はさらに、この潮流のなかで、国外、特にアメリカ人から「シブイ」の美学の権威とみなされるようになる。

なかでも重要だったのは、米『ハウス・ビューティフル』誌の編集長エリザベス・ゴードン〔1906-2000〕の求めに応じて書かれ、まず日本の『心』誌に1960年3月に掲載された、「渋さに就いて」³²⁾と題する論考である。柳によれば、この、「日本民族の共通した高い美的標準語」(p. 37)としての「渋さ」の内容は、以下のようにまとめられる。——第一に、「単純性〔Simplicity〕」あるいは「簡素〔Austerity〕」が求められる。しかしこには、第二の特性として「含蓄性〔Implication〕」や「内面性〔Intrinsic Nature, Depth〕」がなければならない。そして「渋さ」を達成するには、「謙虚性〔Modesty, Humility〕」、「沈黙性〔Silence〕」、「自然さ〔Naturalness〕」、「平常性〔Normality〕」および「亀相性〔Deformity〕」といった要素もまた必須とされた。

この柳の「渋さ」論の初出は日本国内の雑誌であった。しかしこの論考が発表されて間もなく、ここで柳が行った「渋さ」の定義は英訳され、アメリカ国内に流布することとなる。ゴードンは柳の論考からわずか5ヶ月後、『ハウス・ビューティフル』誌上で2か月にわたり「シブイ」を特集し、柳の定義を援用しながら、「豊かさを生みだす有機的な単純性」³³⁾を意味する「シブイ」の美学を米国内に宣伝したのだった。その特集の題である「ディスカバー・シブイ：最高度の美をあらわすことば」(8月号)および「アメリカのものでシブイになる方法」(9月号)が示すように³⁴⁾、この『ハウス・ビューティフル』の「シブイ」特集は、日本の美学の紹介であるとともに、国内の住宅建築の実践に資する目的意識の強いものだった。

加えてこの特集号には、グロピウスやミースといった、在米の外国人モダニストに対するポレミックの意味あいも強かった。ゴードンによれば、彼女が推進する「シブイ」単純性とは、「バウハウスや

『インターナショナル・スタイル』の『レス・イズ・モア』的思考とは何も関係ない³⁵⁾ ものだったのである。

4. 後期：『ハウス・ビューティフル』の「シブイ」特集以後

4.1. 神代雄一郎「ハウス・シブイ」とその反響

ゴードンが『ハウス・ビューティフル』特集の標語として「シブイ」の語を選択した背景には、1950年代のジャポニズムに加えて、その動向と並行した、「シブイ」の語そのものの認知の拡がりがあった。そして同特集は、アメリカにとどまらず、日本を含む他国でも異例のヒットとなった³⁶⁾。

しかし日本の建築界では、この特集号後も「シブイ」の語が浸透することはなかった。戦後国外の日本趣味は当時、吉阪隆正〔1917-1980〕によって嘲笑的に「ジャポニカ」³⁷⁾と名付けられ、1950年代半ばには日本の建築論壇に定着していた。日本国内の論壇では、戦後ジャポニズムに対する嫌悪感は、『ハウス・ビューティフル』の「シブイ」特集以前から顕在化していたのだった。

そのため日本建築界の論客のなかには、『ハウス・ビューティフル』特集号に対しても、谷口吉郎〔1904-1979〕のように好意的に評価する人間は稀だった³⁸⁾。この特集号に対する日本建築界の反応は、建築史家・神代雄一郎〔1922-2000〕が『ジャパン・アーキテクト』〔『新建築』海外版〕に寄稿した「ハウス・シブイ」（1960年12月号）³⁹⁾をはじめとして、おしなべて辛辣なものだった。

そして神代の論考が掲載されたのち、日本国外における「シブイ」受容の是非をめぐり、『ジャパン・アーキテクト』ははじめて、国外からの寄稿を受け入れることとなる。これはすなわち、日本の海外建築メディア初の国際的な論争であると考えられる。

「ハウス・シブイ」における神代は、『ハウス・ビューティフル』で特集された日本趣味が、過去のみに焦点をあてた異国趣味にすぎず、日本文化の理解に対して「ほとんど皮相としか言いようがない」ものであると痛罵した。加えて神代は、この特集の「最も迷惑な」点として、「賢い西洋人は日本文化から“拝借する”能力があるが、劣った日本人には西洋文化を咀嚼する能力がない」と言い続けられているかのような（p.7）印象をもった点を論難している。一方で、その「拝借」の作法についても、特集に掲載された「シブイ」現代住宅は、日本人からみて「コルビュジエ風の三流日本建築が西洋人の目に映るのと同じ」（同）ものだと批判した。

この神代の反感はすなわち、「現代の日本の芸術家や建築家の励みになる言葉がひとつだにない」（同）という点にひとつの起源をもつものである。そのほか、ル・コルビュジエ、ミースといったいわゆるモダニスト勢への対抗措置として「シブイ」の語を導入した『ハウス・ビューティフル』特集の意図に対しては、神代と同様の反感は国外にも現れることとなった。

なかでもイタリア人建築史家ブルーノ・ゼーヴィ〔1918-2000〕の応答は早く、翌年3月に伊『レスプレッソ』紙に「日本でル・コルビュジエが忘れる日」を寄稿した。これは『ジャパン・アーキテクト』1961年9月号で「“シブイ”に関して」と改題され英訳が転載された、ゴードンへの反論である⁴⁰⁾。同号には神代の「日本建築観」⁴¹⁾およびチャールズ・テリーによる「異議あり」⁴²⁾も同時に掲載され、『ハウス・ビューティフル』特集号を皮相な異国趣味だとさらに論難した。特にゼーヴィは、ゴードンが「シブイ」を取り

上げ、それを「バウハウスやミース・ファン・デル・ローエや、合衆国内の理性的に運営されているムーブメントへの対抗手段として提示するのは全くもって単なる反動主義だ」（p. 69）と断じた。ゼーヴィによれば、それはすなわち、ヨーロッパの影響に対する、アメリカ人批評家の危機感の表れでしかない。一方で、そのように「シブイ」の語が「アメリカナイズ」されるのを甘受しながら、「自分たちの同時代的活動をそのように見境なく批判されて、日本人建築家も嬉しいはずがない」（p. 70）。

しかしゼーヴィの独自解釈によれば、『シブイ』はまた、安定的で土着的な、刹那的であることに否定的な方法も意味しうる（同）。このように「シブイ」の語を再定義しながら、ゼーヴィはさらに、自国の過去に逆らわないかたちで、新たな技術に即した新たな建築創造を行うことこそ「シブイ」のだと論じた。ゼーヴィがこの路線に沿った日本人建築家の筆頭に挙げたのは丹下健三〔1913-2005〕だった。そしてゼーヴィは、チャールズ・テリーの論と同様に、ル・コルビュジエの打ち放しコンクリートが彼ら日本人建築家の創造のモデルとされていることを指摘し、「ル・コルビュジエがアンチ・シブイの完全な体現者たりうることは偶然ではない」（同）という、ゴードンの保守主義に対する反語的皮肉で論を締めくくった。

他方、神代の「ハウス・シブイ」に対する『ジャパン・アーキテクト』誌内で最初の応答記事は、神代の記事が掲載された約半年後に、コロラド大学建築学科准教授のキャル・ブリッグスによって寄稿された「日本建築の意義」である。ここでのブリッグスもゼーヴィら同様、ゴードンに対する反論のかたちで、モダニストの先進的実践にこそ日本建築に学ぶ「シブイ」質が必要なのだとした。ブリッグスの整理によれば、日本建築の特質のなかでも特に、「シブイ」の概念に集約される設計思想の精髓とされたのは「統合力」である。そこでは「より少なくが本当により豊かになったとき、それが『シブミ』なのである」⁴³⁾と語られており、「シブイ」という語には現代建築の実践を導くデザイン原理のすべてが付託されていた。

4.2. 国内論壇内部における「シブイ」の位置

このように、『ハウス・ビューティフル』の特集で広い認知を得た「シブイ」の語をめぐっては、国外の論客を巻き込みモダニスト対アンチ・モダニスト論争が起こった。しかし、この論争自体は日本国外、あるいは『ジャパン・アーキテクト』を筆頭とする国外向け雑誌の中で主に英語で行われたものであり、日本国内の日本語読者にはその論争の存在はほとんど知られなかったものとみられる。

また、国外で「シブイ」の語が認知されている事実は知りながら、国内の論壇ではその実態や是非の議論はほぼ行われていない。

その例外とみなせるのは、斎藤寅郎〔1902-1971〕の北米視察である。この調査の顛末は『ジャパン・クオータリー』誌上に寄稿した「近代建築における日本的要素」（1962）⁴⁴⁾に詳述されているが、斎藤のこの視察の重点こそが、当時日本国外で流行していた「シブイ」という難しい言葉の意味を、人びとが本当に理解しているのかどうか」を知ることだった。

この問題意識から書かれた斎藤の論は、明治維新以降、分離派結成までの日本が西洋を模倣しているあいだに西洋が徐々に日本建築の本質に対する洞察を深めていった、という筋立ての、近代建築史の素描である。斎藤の見立てによれば、特に規格化された木造柱梁

構造こそが、西洋に「未来に向けた出発点を提供した」(p. 425)。そうして特に、第二次世界大戦以降には、「日本の伝統建築を現代建築の祖型とみなす取り組み」(同)までが行われるようになり、「アメリカ建築が日本建築の魂を吸収した成功例」(p. 422)としてミースのイリノイ工科大学クラウンホール(1950-56)のような、正しく「シブイ」作品も生まれたとされている。

斎藤の「近代建築における日本の要素」は英語での発表だったが、翌年には同内容を日本建築学会の大会講演でも発表している⁴⁵⁾。しかしここで斎藤は、この講演用の調査の目的が、北米における「シブイ」流行の調査であった顛末の説明を割愛している。これは、斎藤がすでに英語で表明していた通り、「我々〔日本人〕の“渋い”とアメリカの建築雑誌が例示しているもののあいだにいまだ多くの食い違いがある」(p. 425)ことに起因する、日本語の「渋い」と英語の「シブイ」との差異を混同したさいに起こるであろう、聴衆の混乱を避けるための配慮だと考えられる。

この建築学会大会で斎藤と同席した吉田五十八〔1894-1974〕も、「建築の日本の」ということと題した報告のなかで、「アメリカあたりが、どうして日本的な建築にそんなに執着を持った」かについて語っている。ここで吉田は、「桂離宮みたいに下がピロッティになっている」例を挙げながら、「日本のわび、さび、しぶさといったものは、向うからみれば、非常に近代的なのです」と語り、この流行に対する静観と不干渉の姿勢を表明した⁴⁶⁾。

4.3. 『ハウス・ビューティフル』特集以後の国外「シブイ」受容

こうして日本の論壇では、「シブイ」の語はにわかに話題にのぼりながら、1960年代初頭にはすでに忘れられることとなった。他方、国外のモダニストによる「シブイ」受容は1970年ごろにかけてさらに進行し、この語は建築批評の術語として世界的に浸透していく。

この帰化過程で特に重要なのは、1960年代半ばにドイツ人建築家ハインリッヒ(ハイノ)・エンゲル〔1926-?〕によって著された、『日本の住宅：現代建築のための伝統』(1964)⁴⁷⁾という大著である。同書は京都大学に籍をおいて進められた日本の伝統木造工法のディテール研究の集大成であり、その副題が示しているように、現代的実践への応用の目的意識が明らかなものだった。同書の企画を発案したグロピウスが序文で述べている通り⁴⁸⁾、グロピウスは「日本人の〔デザインに対する〕アプローチの態度や仕方が、ある場合にはドイツのバウハウスが抱いた信念と非常に近しい」(p. 17)ことを意識していたのであり、現代的応用に供しうる日本建築の技術研究書は、このような大部のかたちでは、ドイツ語でも英語でもそれまでには存在しなかった。

同書において「シブイ」の語には、建築創造の基本原理、すなわち、相互に矛盾する価値同士の創造的止揚をあらわす標語としての位置が与えられることとなった。エンゲルによれば、この術語は、「意味は明示されるが控えめである、原初的形が洗練されている、表現を軽くすることに厳しい、不規則な図案の秩序、あるいは技術の作為のなさを完遂するなど、ふたつの対極の、不安定であると同時に意味のあるバランス」(p. 460)を意味するものなのである。

「シブイ」の語はこうして、日本建築の特質であることを超えて、広く現代建築の創造的実践の標語となった。たとえば、1969年から70年にかけ、増田友也〔1914-1981〕は日本建築史を独、仏、英語

で出版している。その序文として、モントリオール大学建築学部教授アンドレ・コルボスが「近代建築と日本の伝統」と題する論考を寄稿している。ここでは、「シブイ」はもはや、日本趣味のことではなく、日本建築の原理であることさえ超えた、質をそなえた建築全般の大原則であるとされている。そしてエンゲル著作の5年後に発表された論であることを背景に、コルボスもやはり、ふたつの対極的価値の止揚のなかに「シブイ」の正しい均衡を思いみている⁴⁹⁾。

5. 結語

以上明らかにしたように、従来ゴードンによる『ハウス・ビューティフル』特集号を嚆矢として知られるようになったとされる「シブイ」の語には、それに30年以上先だつ国際的受容の前史があった。ゴードンの特集がセンセーションを巻き起こすこととなったのは、第二次世界大戦終戦後のアメリカを中心とするジャポニズムに加えて、その特集号以前に、「シブイ」の語がすでに「日本的なもの」を象徴する語としてある程度の認知を得ていたからにほかならない。

そうしてゴードンの特集号は、建築における「日本的なもの」をめぐる国際的言論空間に、モダニスト対アンチ・モダニストという対立構造を与えることとなった。もともと戦間期ドイツ語圏のモダニストのあいだで議論されていた「日本的なもの」の抽象化と実践的応用は、戦後ジャポニズムのなか、より広い論客によって議論の対象とされた。その結果、異なる建築的理念を奉ずる立場がそれぞれに解釈した理想の「シブイ」建築同士には、おのずから齟齬が生じることとなった。

他方、ゴードンによる「シブイ」の廣告は、建築における「日本的なもの」をめぐる言論空間に、日本対他国という図式を鮮明化させることともなった。この点において、国際語としての「シブイ」をめぐる議論の高まりのなか、この図式に固執していたのはほぼ日本人の論客のみであり、日本人が解釈する「渋い」とそれ以外の「シブイ」の差異を論じたのが彼らのみであったことは特筆される。ここで日本人の論客には、「シブイ」をめぐる如上の国際的対立構図への意識は希薄であり、この構図に対する主体的参加の痕跡はみられない。かくして「シブイ」の語の受容は、ゴードンの特集号のうち、じきに日本人を除いたかたちで展開することとなった。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP18J00665および、日本学术振興会若手研究者交流事業スイス枠(平成30年度)の助成を受けた。

参考文献

- 1) Isao, K.: *Shibui, Gaikokugo ni natta Nihongo no Jiten (Encyclopedia of Imported Words from Japan)*, Tokyo, Iwanami Shoten, pp. 90-94, 1999 (in Japanese)
熊倉功夫: しぶい、外国語になった日本語の事典、岩波書店、pp. 90-94, 1999
- 2) Katahira, M.: *The Images of Japanese Gardens in the West, Kyoto, Shibunkaku*, 2014 (in Japanese)
片平幸: 日本庭園像の形成、思文閣出版、2014
- 3) Penick, M.: *Tastemaker: Elizabeth Gordon, House Beautiful, and the Postwar American Home*, New Haven, London, Yale University Press, 2017
- 4) Guth, C. M. E.: *Design before Design in Japan, The Routledge Companion to Design Studies*, London, New York, Routledge, pp. 508-17, 2016

注

- 注 1) 本稿では主に、日本人を明確に含む知識生産の実態を攻撃する。用いる史料の選定は「シブイ」受容に関する網羅的な収集作業を基礎とし、日、英語史料を主に仮、独語史料までを含む。
- 表記にかんして、国外受容された、外国语としての「シブイ」「シブミ」は、日本語と区別するために片仮名表記とする。「受容」の語義については拙稿 江本弘: 日本の戦前建築界におけるジョン・ラスキン受容に関する研究、建築史学、第63号、p.6、2014.9 参照。
- 注 2) 「シブイ」に触れた日本建築・美術論の近著にはたとえば以下がある。
Graham, P. J.: *Japanese Design: Art, Aesthetics & Culture*, Vermont, Tuttle, 2014; Lawrence, R. G.: *Simply Imperfect: Revisiting the Wabi-Sabi House*, Gabriola, BC, New Society Publishers, 2011; Parramore, L.: *Japan Home: Inspirational Design Ideas*, Tokyo, Vermont, Tuttle, 2009; Lim, S.: *Japanese Style: Designing with Nature's Beauty*, Salt Lake City, Charleston, etc., Gibbs Smith, 2007.
- 注 3) 磯崎新: 建築における「日本的なもの」、新潮社、2003; 五十嵐太郎: 日本建築入門: 近代と伝統、筑摩書房、2016。
- 注 4) Harada, J.: *The Gardens of Japan*, London, The Studio, 1928. 以降の本文中、書名および引用本文の和訳はすべて論者による。原語併記が必要な場合は亀甲括弧にて併記とする。
- 注 5) *Idem: The Lesson of Japanese Architecture*, London, The Studio, p. 45, 1936.
- 注 6) Baldinger, W. S.: *Book Reviews*, College Art Journal, Vol. 16, No. 2, p. 166, Winter 1957.
- 注 7) 国際文化振興会（KBS）の設立経緯や活動は 芝崎厚士: 近代日本と国際文化交流: 国際文化振興会の創設と展開、有信堂、1999 が詳しい。
- 注 8) Harada, J.: *A Glimpse of Japanese Ideals: Lectures on Japanese Art and Culture*, Tokyo, Kokusai Bunka Shinkokai, p. 31, 1937.
- 注 9) Uenoda, S.: *On the Shibui Konomi: An Elusive Phase of Japanese Aestheticism, Japan and Jazz: Sketches and Essays on Japanese City Life*, Tokyo, pp. 22-23, 1930.
- 注 10) *[Idem]: Shibui Konomi: An Elusive Phase of Japanese Aestheticism, We Japanese: Being Descriptions of Many of the Customs, Manners, Ceremonies, Festivals, Arts and Crafts of the Japanese besides Numerous Other Subjects*, Vol. 1, Hakone, Fujiya Hotel, p. 15, 1934.
- 注 11) Yanagi, S.: *Folk-Crafts in Japan*, Tokyo, Kokusai Bunka Shin-kokai, p. 14, 1936.
- 注 12) Taut, B.: *Bruno Taut in Japan: Das Tagebuch (Dritter Band: 1935-1936)*, Berlin, Gebr. Mann Verlag, p. 116, 2016.
- 注 13) *Idem: I kamono und Inchiki, Japanische Architektur Geschichte und Gegenwart*, Stuttgart, Gerd Hatje, p. 70, 1983.
- 注 14) Okakura, K.: *The Book of Tea*, New York, Duffield, 1906; *idem, Das Buch vom Tee*, tr. Marguerite and Ulrich Steindorff, Leipzig, Insel-Verlag, c1923. 邦訳版初版は1929年(岩波書店)。
- 注 15) 後述の『ディー・フォルム』日本特集(1933)ほか、Platz, G. A.: *Wohnräume der Gegenwart*, Berlin, Propyläen, 1933 等も参照。
- 注 16) Henrich, H.: *Japanische Wohnkultur, Die Form: Zeitschrift für Gestaltende Arbeit*, Vol. 8, No. 7, p. 193, 1933.7.
- 注 17) Yoshida, T.: *Das japanische Wohnhaus*, Berlin, Ernst Wasmuth, 1935.
- 注 18) ワルター・グロピウス: あいさつ: 日本建築学会懇親会における挨拶、グロピウスと日本文化、彰国社、p. 28, 1956.
- 注 19) Suzuki, D. T.: *Buddhist, especially Zen, Contributions to Japanese Culture, Essay in Zen Buddhism (Third Series)*, London, Luzac, p. 320, 1934; *idem, Japanische Kultur und Zen*, Nippon: *Zeitschrift für Japanologie*, Vol. 1, p. 78, 1935. 本論文の対象年代全体にわたり、日本国外向けの知識生産にかんしては「ワビ」「サビ」の2語の使用を避け、日本美術の全体的特質を「シブイ」一語でまとめる傾向がみられる。注32の柳宗悦記事も参照。
- 注 20) Kawanami, S.: *Japanische Farben*, Nippon, No. 3, p. 15, 1935.4.
- 注 21) たとえばペーレントは、1930年代アメリカの建築論壇において日本家屋の現代性を論じた嚆矢である。Behrendt, W. C.: *The Japanese House*, The American Magazine of Art, Vol. 27, pp. 589-93, 1934.11.
- 注 22) Walker, R. T.: *A Question of Simplicity*, Pencil Points, pp. 457-58, 1937.7; *idem, Japanese Architecture Simple Yet Complex*, The Japan Magazine, Vol. 29, No. 4, pp. 26-28, 1939.12; *idem: Nipponese Impressions*, Architectural Forum, Vol. 72, No. 2, pp. 95-96, 1940.2.
- 注 23) アントニン・レーモンド: 日本建築の原則、私と日本建築、鹿島出版会、p. 59, 1967.
- 注 24) 国際文化振興会: 序文、日本文化の特質、日本評論社、p. 1, 1941.
- 注 25) ルドルフ・ヘッケル: 渋味: 日本文化と歐州文化の相互関係、ibid., pp. 162-63, 1941. 原文ドイツ語と考えられる論考(未発見)の日本語訳。
- 注 26) Kishida, H.: *Japanese Architecture*, Tokyo, Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways, c1935; *Architectural Japan: Old / New*, Tokyo, The Japan Times & Mail, 1936.
- 注 27) Raymond, N. P.: *On the Design of Interiors, Crafting a Modern World: The Architecture and Design of Antonin and Noémi Raymond*, New York, Architectural Press, p. 307, 2006. なお彼女は1935年の時点ですでに、日本人による『渋い』の誤たれたる使用に叛旗を翻しつゝ赤星喜介郎の室内装飾を行ったと語っている。ノエミ・レイモンド: 漫想『室内装飾』、建築知識、第1卷、第9号、p. 19, 1935.12.
- 注 28) イーゼ・グロピウス: 日本だより: グロピウス夫人より T. A. C. メンバーエ宛、グロピウスと日本文化、彰国社、p. 211, 1956.
- 注 29) 河合正一、河合恒: 一つの報告、グロピウスと日本文化、彰国社、p. 113, 1956. 報告はグロピウスが用いた「シブイ」と、言及直後の日本建築論を切り離している。しかし論者はこれを、日本建築の実践的デザイン原則を「シブイ」の語に代表させた言及とみる。前注27参照。
- 注 30) Terry, C. S.: *Tange Kenzo: No Friend of Tradition*, Japan Quarterly, Vol. 6, No. 1, p. 209, 1959.1-3.
- 注 31) Yanagi, M.: *The Way of Tea*, Honolulu, Hawaii, Honolulu Academy of Arts, 1953.
- 注 32) 柳宗悦: 渋さに就いて、心、第13卷、第3号、pp. 35-42, 1960.3. なお、柳はこの記事で「今迄この言葉について何も系統立てて考へた事がない」(p. 35)と回顧しているが、これは1936年に行われた、*Folk-Crafts in Japan*(注11参照)での「シブイ」の紹介と矛盾する。
- 注 33) Gordon, E.: *We Invite You to Enter a New Dimension: Shibui, House Beautiful*, Vol. 102, No. 8, p. 95, 1960.8.
- 注 34) 8月号原題: "Discover shibui: the word for the highest level in beauty"; 9月号原題: "How to be shibui with American things".
- 注 35) Ibid.
- 注 36) Penick: 2017, p. 208.
- 注 37) 吉阪隆正: ジャポニカ是非論、朝日新聞(朝刊)、p. 5, 1954.4.25 以降使われるようになった。1950年代のジャポニカ論争は別稿にて論ずる。
- 注 38) 谷口吉郎: 世界語としての「しぶい」、芸術新潮、第11卷、第11号、pp. 56-63, 1960.11.
- 注 39) Kojiro, Y.: *House Shibui*, The Japan Architect, pp. 6-7, 1960.12.
- 注 40) Zevi, B.: *Vanno in Giappone per dimenticare Le Corbusier, L'Espresso*, No. 10, 1961.5.3; *idem: Concerning "Shibui"*, The Japan Architect, pp. 69, 1961.9. イタリア語原文は「シブイ: 翻訳不可能の理想」と改題され著作集に収録された。*Idem: Shibui, Ideale Intraducibile, Cronache di architettura*, Vol. 7, Laterza, pp. 156-59, 1979. 以下、本文中の引用頁指示は *The Japan Architect* より。
- 注 41) Kojiro, Y.: *View of Japanese Architecture*, The Japan Architect, pp. 67-68, 1961.9.
- 注 42) Terry, C. S.: *Taking Exception*, ibid., pp. 70-71.
- 注 43) Briggs, C. A.: *The Significance of Japanese Architecture*, The Japan Architect, p. 63, 1961.5.
- 注 44) Saito, T.: *The Japanese Element in Modern Architecture*, Japan Quarterly, Vol. 9, No. 4, pp. 419-28, 1962.10-11.
- 注 45) 斎藤寅郎: 現代建築における日本的なものの理解について、建築雑誌、第78卷、第922号、pp. 85-87, 1963.2.
- 注 46) 吉田五十八: 建築の日本的ということ、ibid., pp. 87-88.
- 注 47) Engel, H.: *The Japanese House: A Tradition for Contemporary Architecture*, Charles E. Tuttle, 1964.
- 注 48) Gropius, W.: *Forward*, ibid., pp. 17-18.
- 注 49) 「寡黙だが不活性ではない。美しいが表層的ではない。シンプルだがこれ見よがしなぞではない。地味だが注意を引きつけ、生き生きしている。独創的だが剽染みがある。移り変わりやすい流行とは逆に、安定的で土着的である。」引用は Corboz, A.: *Modern Architecture and Japanese Tradition*, in Masuda, T.: *Living Architecture: Japanese*, New York, Grossset & Dunlap, pp. 3-5, 1970 より。

THE DEVELOPMENT OF “SHIBUI” INTO A GLOBAL TERM OF ARCHITECTURE

Hiroshi EMOTO *1

*1 JSPS Research Fellow (PD), Chiba University, Dr.Eng.

Japanese professionals tend to harbor ambiguous feelings toward the overseas usage of the term *Shibui* in architecture, since despite being colloquially uttered in their language, they themselves have rarely used it as an actual architectural term. This divide in understanding seems to be a serious one, suggesting a potential miscommunication throughout the global sphere of architectural discussion. Based on materials mainly written in Japanese, English, and German since the 1920's, this paper investigates the global reality of intercultural exchanges about this term, and how Japanese architects largely chose to sidestep them.

The propagation of the notion of *Shibui* started within the Anglosphere around the late 1920's. It was introduced as something untranslatable, but which represented the ultimate aesthetics of the Japanese, tending towards that which is simple, austere but meaningful. In the mid-thirties, a group of mainly foreign American readers got a hold of such influential works as Soetsu Yanagi's *The Folk-Craft of Japan* and Harada's *The Lesson of Japanese Architecture*. Non-Japanese readers gradually came to know the word through these publications as well as daily conversations with speakers of the language. The German architect Bruno Taut [1880-1938] was one of those who experienced these circumstances while staying in Japan from 1933-36, and interpreted the ideal beauty of Japanese architecture as *Shibui*, or the “unobtrusive, quiet and harsh.”

Besides Japan and the U.S., the German sphere in Europe was potentially another center for the production of knowledge about *Shibui* and Japanese architecture. While there was no German introduction of the word during the twenties, they had nourished their interest in the intrinsic modernity of Japanese traditional wooden construction as early as immediately after the end of WWI. A number of influencers would soon emigrate to the U.S., where Japanese promotion of *Shibui* to the American public was at the forefront, and the aesthetic of *Shibui* was in the process of making itself known to a German-reading public. Walter Gropius [1883-1969], for example, started to combine his idea of a “Japanese” modular, flexible, and nature-loving architecture with the word *Shibui*.

In this early stage of outbound knowledge production, Japanese architects were pretty much uncommitted to it, as the word was too colloquial to be aesthetically defined in their own language, and they did not share the goal of propagating Japanese aesthetics, for which *Shibui* had become a buzzword.

In the postwar craze of all things Japanese, the word gradually got popular among the Pacific-American public from the early fifties, before being further popularized by Elizabeth Gordon's special issues in 1960 for “Discover *Shibui*” in the influential American magazine *House Beautiful*. However, due to her notoriously offensive attitude toward contemporary efforts in architecture, this prompted a string of critical backlashes. Japanese architectural historian Yuichiro Kojiro [1922-2000] spoke in *The Japan Architect* against Gordon's “oh-so-wonderful romanticism,” and his criticisms would attract overseas followers like Bruno Zevi [1918-2000] in Italy.

Thus was formed a global space of dispute over the modernity (and anti-modernity) of the naturalized and de-nationalized *Shibui*. In fact, most Japan architects did not have the means to know about this external phenomenon, and those who did had no avid motivation to join, since its contents kept changing and diversifying according to each player's ambitions and local contexts, making the whole scene appear as a quite chaotic one to their eyes.

(2019年7月9日原稿受理、2019年11月25日採用決定)